総合情報学部20周年を祝して

# 開設当初の思い出

高木　教典(注)

総合情報学部の開設から20周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。記念の座談会にお招きを受けながら、出席できませんでしたことをとても残念に思います。

学部が設立されるまでの経緯については、『関西大学年史紀要第９号』（1997）をお読みいただくとして、設立以降のことについて思い出の若干をお話しておきたいと思います。

スタートは、助手３人を含めて57名の教員でした。関大の中で移籍した人は、私を含めて新学部に就任することを前提に関西大学に着任していた者が３人おりましたので、それを入れまして11人でした。ですから、以前から関西大学におられた方は８名だけですね。

いざ学部が始まってみますと、教員はみんなそれぞれ意欲に燃えて就任してみえたわけですが、大学にいた教員の場合も含めて、初めてのことが実にたくさんありました。

既設の学部では難しい新しい教学の制度を次々と導入して行きました。セメスター制の採用、秋入学、シラバスの作成、授業評価、高専卒の２年次編入、休講は土曜日に補講とか、そういう新しい教育方針をいろいろと盛り込んでおりましたので、非常に戸惑いがあったと思います。

特に教材作成は、大変だったと思います。研究室にソファーベッドが入っていますので、毛布を持ってきて泊り込んで教材を作成する教員もかなりありました。大変熱心に、しかも意欲的に新しい教育を軌道に乗せる努力がなされましたが、何分にも新しい教育で、しかも大学が初めてという教員も多かったものですから、立ち上がりは苦労が多かったと思います。

コンピュータ機器の選定は難しかったですね。急速な機器の進歩があり、付随したソフトの開発が相次ぎ、意欲を持てば持つほど、それなりに性能のいい機器が欲しい、ソフトが入用と、次から次へと要望が出されましたね。教員間で意見の違いなどが出てきまして、それらの調整はかなり難しかったように思います。何もかも必ずしも順風満帆に進んだわけではないということですね。

総合情報学部は「文理総合」を学部の理念としていましたから、カリキュラムは「文理総合」で履修できるモデルを考えましたし、教員編成も「文理総合」で考えられました。それだけに、

---

（注）東京大学名誉教授、総合情報学部初代学部長

2013年度の「関西大学高槻キャンパス祭」に合わせて、「総合情報学部創設期の思い出」座談会が開かれた。当初、高木教典先生（初代学部長）は出席予定であったが、健康状態に鑑みて、当日は残念ながら欠席されることになった。事後に先生と連絡をとり、メッセージを寄稿していただくことにしたが、先生の意向を汲み、『関西大学年史紀要第９号』（関西大学年史編纂委員会編、1997）所収の「高槻キャンパスの開設」座談会での発言をもとに編集することとなった。編集には、井上宏（初代学部長代理）が当り、それに高木先生の加筆訂正を加えてメッセージとさせていただくことにした。

ざっくばらんに言いますと、文系、理系、一般教養課程に相当するような科目や外国語などのいろんな専門の人が複合している学部の難しさというのはありましたね。

学部の理念として「文理総合」を強調していましたが、その結果としてどんな学生を育成するのかについて、私は「情報ジェネラリスト」の理念を掲げました。情報教養人と言いますか、問題意識をもって情報技術が駆使でき、視野を広く持ち、国際性を身につけた人材というイメージです。

私は、当初から大学と地域社会との関係を重視していました。5月の最終の日曜日に「オープンキャンパス」を実施しましたのもその一例ですが、これが20年経った今も続けられているのを知って、大変嬉しく思っています。

この20年の間に、関西大学においても、次々と新しい学部や研究センターが出来て行きましたが、その拡大発展の始まりを、高槻キャンパスが果たしたのではないでしょうか。大学の校地不足の問題解決もそうですが、新しいさまざまな教学の方針を率先して実践し、後々の教学のモデルを開発し、提供したのではないかという気がしています。

20年を経て、キャンパスの模様も随分と変わったと聞きますが、その変わったキャンパスを一度見てみたいと思いながら、それが果たせないのがとても残念ですが、発展振りを聞くにつけ嬉しく思っているところです。

私は、社会学部で2年、総合情報学部で8年、合わせて10年を関西大学で過ごし、多くの先生、職員の方々、学生との出会いがあり、思い出が一杯詰まった関西での生活でした。苦労も多かったですが、今では全てが良き思い出となっています。

20周年を祝すと同時に今後の一層の発展を心からお祈り申し上げます。